

Title	聖成吉思汗の家譜(2)
Author(s)	山本, 守
Citation	東洋史研究 (1935), 1(2): 135-139
Issue Date	1935-12-10
URL	http://dx.doi.org/10.14989/138682
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

聖成吉思汗の家譜 (2)

山 本 守 譯

賢く生れた夫人母、聰明に生れた子供を、發育した細野葱で常に育て、國の主となした。優しく生れた夫人母、天命あつて生れた子供を、魚で育て、命ある可汗の位に就かしめた。

さて特穆津・哈薩爾二人で烏格楞哈屯に云ふに、「これまで網ですくつた魚を、伯克特爾が奪ひ取つた。又哈薩爾が射取つた雀を奪ひ取つたので、伯克特爾・伯勒格德依二人を棄てよう」と云つた時、烏格楞哈屯は云ふに、「あゝ、我子供よ、さきの岱齊果特の *Urbaa gool* 誘伯特郭幹の五子と同様に明かして話そう。汝等には影より他に友なく尾より他に鞭なし」と言つた。この言葉に（を開いて、特穆津・哈薩爾二人で、門を棄てゝ出て行つた。出て行つた後、八匹の栗毛の驕馬を伯克特爾が見守つて居る時、特穆津は前から、哈薩爾は後から、伯克特爾を挟んで、亡くしようとして行つた時、伯克特爾が言ふのに

は、「汝等我を棄てるならば即ち棄てよ。弟伯勒格德依を棄てる勿れ、汝等に力を與へるなり。」と云つた時、即ち伯克特爾を棄てゝ特穆津・哈薩爾二人で母の前に行つた處、烏格楞哈屯曰く、「子供等よ、汝等は峰に迫つて驅ける *haak sahar* (不明、獸名ならん) の如く、胞衣を咬む黒犬の如く、雨の日に驅ける狼の如く、山鶏を骨まで咬む駱駝の如く、妄に驅ける *Bara* (不明、獸名ならん) の如く、捉へることの出来ぬ虎の如く、我子よ如何なる事情で斯くは爲せるぞ。」と尋ねるに、突然岱齊郭特から急がせて消息が來たのは、（のによると）「汝等親子五人に用はない。只特穆津を此方に遣はせ」と言つた時、特穆津はこの言葉を聞くや否やおのんの洞に秘に入つて隠れた。岱齊郭特が知つて、這入つた穴を守つて居るに、「特穆津は」洞に三泊して出て來て、腹帶を締めながら、胸當を當てゝ居ながら滑つて落ちた。又思ふに「腹帶を正

しく爲して居るのに、胸當鞍が何故滑るのか。これ天神我を止めるのであらう。」と返つて行つて、三宿した。次に道の上に堅固な白い石で塞いで擱いてあるのを見て、「これ天父我を止めるならん」とて歸つて、又三夜宿した。食物飲物無く、前後九日宿つて、「死なうと、如何ならうと天父知るのみ。」と「出て見ると」岱齊郭特は、もとの儘見守つて居た。特穆津を捕へてから、鐵枷をはめて監視するに、托爾干沙喇(秘史鎖兒罕失刺)の二人の子供、齊拉袞秦拜等可愛想に思つた。岱齊郭特は夏の満月の月の十五日に、大宴會をなして、特穆津を一人の弱い人を以て番させたのに、特穆津はその人を鐵鎖で打つて棄てた時、その人起きて叫び呼んだので、聲を聞いて岱齊郭特が喧騒して、徒渉して來るので、特穆津は水に入つて臥した。偶々托爾干沙喇が見て曰く、「Togarの子よ臥つて居るのが善い。我他を探そう。明るい子よ、馬をおさめよ、善き子よ、鬚を愛せよ。」と云つて岱齊郭特を隨行して、散じて歸つた。暗い夜になつた後、乳罕の托爾干沙喇の家に入らんとするに、托爾干沙喇曰く、「おゝ特穆津よ、汝の母に行つて會へ。こゝに汝を如何にして入れるか。」と云ふに、托爾干沙喇の子、齊拉袞・秦拜二

人曰く、「這入つて來た雀を救へよ。やつて來た子供を忠實に世話しないならば、我等に益何ぞあらん。」と言つて斧で桎を毀して特穆津を出してやつた。羊毛ある車に、托爾干沙喇は自分の哈塔干(秘史合答安)と名附くる女を、特穆津と共に隠しておいた。岱齊郭特は早朝起きて、「鐵鎖桎ある子供、何れに行つたか。」と家々を搜して、乳罕の托爾干沙喇の家に到つて、搜して羊毛ある車を搜すに托爾干沙喇の長子が隠して、「かゝる夏の早に、生きてる人を、羊毛ある車に隠さんや。」と言つた時、皆散じて行つた。そこで托爾干沙喇は云ふのに、「嗚呼、特穆津よ、汝魂が出づる程に失つた。」と云つて、“Ernek Čagackin”

不生駒的

甘草黃

(秘史に額列木克

忽刺黑赤とあるものと同様であらう)

を取つて特穆津に與ふる時、一枚の自分の着物を解いて

取つて與へた。Del ehetü horga(秘史帖勒忽里罕即ち喫)

母乳的羔兒と同様であらう。)を殺して、肉で辨當を作つ

て與へて、「汝の母に早く會ひに行け。」とて行かしめた。

そこで特穆津は急いで行つて、自分の家に到着して、母に會つて楽しんで暮す中に、岱齊郭特は跡を追つて來て、八銀合馬(源黃鬪馬)を掠奪して、運び去つた。特穆

津は後から、伯勒格德依が獵を捕へるのに乗る “Tangi

honggor” (秘史)

〔廿草黃馬〕

〔史〕蒼兒吉 晃齡里 中舌

に乗つて追ふ。踏みつけら

れた草をたよりに追つて行く間に Lahu bayan (源阿郭

巴延秘史納忽伯顔) の子 Hiitük bohorči (源博郭爾濟史字

幹兒出) が、桶をとつて日蔭の所で、馬の乳を搾つて居

る所に、特穆津に遭つた。博郭爾濟尋ねて「何處に行く

か。」と言つた時、特穆津は詔して「我八匹の銀合馬を追

つて來た。」と言ふ。博郭爾濟は即ち “Gooa Çohor” な

る馬に特穆津を乗らしめて、自分は澤山の馬羣の所に行

つて “Orok Sirgai” なる馬に乗つて、特穆津と共に追つ

て、岱齊郭特に到つた。到つて見れば、八銀合馬を澤山

で圍んで眠つて居る。特穆津、博郭爾濟に勅して「汝馬

をつかまへて居れ。我入らん。」と言ふに博郭爾濟曰く、

「福ある、善き日に愛撫し、危險なる日に避けてあるな

らば、此處に來て如何なる用があるのか。」と言ふに、特

穆津はこの言に賛成して、二人で入つて、八匹の銀合馬

を取返して、出て行く所に、Lahu bayan は、歸る途上

に待つて居た。二人に遇ふや否や、こちらを向いて笑ひ

彼方を向いて泣いて云ふのに「我子よ、汝この行を忘る

ゝ勿れ。」と云つて、Del ehetü horga (前出) を殺して、

糧食を作つて遣はした。特穆津は八匹の銀合馬を取り返

して、烏格楞哈屯に持つて來て遇つた時に、烏格楞哈屯・

哈薩爾と弟等は「彼が」歸つて來たのを見て喜んだ。

これより特穆津・伯勒格德依二人で「岱徹辰の娘布爾德

娘を、九歳なる時見て、歸つて來てから久しく分れて居た

のであるぞ。今探しに行かん。」とてけるれんに沿うて尋

ねて行くに、Çihçür (秘史の扯徹兒) Çohorho (秘史の

山名)

赤忽兒忽) 兩地の間に岱徹辰・鴻吉喇特こゝにあり、特穆

津を見て大いに喜んだ。岱徹辰曰く「岱齊郭特は汝等兄

弟を惡くなしたと知つて、心配して絶望の思がした。今

日太陽を見た。」と云つて Bütchejin (秘史字兒帖兀只)

と名附くる娘と一緒にして出發した。出發して來る中に

岱徹辰はけるれんの遊牧地 “Jol nugur” に到つて、身體

が熱病にかゝつたので歸つて行つた。Bütchejin の母

は Jütei (秘史擲壇) と云ふ名であつた。娘を送つて行く

に “Senggur” 河 (秘史桑沽兒) に到つて引返した。Jütei 母

の歸つた後で、伯勒格德依を遣はして、博郭爾濟を仲間

にしようとして、尋ねて行つた時、博郭爾濟は伯勒格德依が來たので、父母にも告げずに、Bügür（秘）（史字才禿兒）黃馬に乗つて、青い毛衫を着けて、伯勒格德依と共に來た。彼が仲間となつた原故はかゝる事情であらうか。

40) Sengür 河から移つて、けるれん江の源なる

Bürge（秘）（史不兒吉）の岸に家居した。Jitei ehe（母）の與

へた黒い貂鼠の襖子を、伊蘇凱の如く大事になした。我が父と盟友（蒙語）（anda）なるけれいと王罕に至つて與へた。

家に歸つて來て汗の大位に坐した。

天より命あつて生れたる特穆津青吉斯（成吉思）汗であらうか。佛の涅槃に入つて、三千二百五十餘年になりて後、十二の悪い汗等が生れた。全生物を苦しめてゆくに、それを押へつける爲に、佛 jiwangiric（？）を與へて成吉思汗を生んだと云ふ。五色四外國より始めて、全世界の三百六十一聖あり、七百二十語ある國の租税を取つて、牛が地に、足が一段々々に安かになつて“Zakrawardi hagan”の如く賞讃した。

成吉思汗は壬巳年に生れたのだらうか。四十五歲丙寅年におのん江の源に、九脚ある白蠶を立て、汗の大位

に坐した。これに依つて、哈薩爾主君を恐れて、棄てゝ逃げるに國の主勅すらく「Sübegedei bagaturを同行して追へ。」とて翌日早く云ふのには「驕馬の頭が出てゝ來る如く、長の黃帽（きんぼう）の頂になつた Ch（？）の如くたゝんだ、石の如く結びたる、大刀の力、我友達の影、竹の如く撒圍せる城の如く圍める我官人兵士聞け。暇で居る時には小牛の「歩む」如く行け。迅速に跳ねて行動する時には鶻（とび）の如く跳ねて馳けて行けよ汝等。彼方此方に斬りまくる時には、鶻（とび）の如く跳ねて馳けて行け汝等。立居には牛の如く行け。Sorohlahu（？）迅速に行動する時には海東青の如くかけて行け。お互に笑つて行く時に、鈍な黒牛の如く馳けて行け。敵と射合ふ時に、鷹の如くおどつて馳けて行け。飢えたる虎の如く、配偶を失つた鵬（たけ）の如く行け汝。日中には牡の狼の如く行け汝。暗黒の夜は黒い鴉（くろ）の如く行け汝。」と勅あつた時 Sübegedei bagatur 返事するのに「出来るか否か追つて見よう。出来るだけの事をやつて見よう。我が主の福知らしめせ。」と申し上げて、追つて行つて、直に追着いて、到つて哈薩爾の方に云ふに「仲間親戚から離れるならば、邪な人の食ひ物になるであらう。眞實の人から離れるならば孤兒の食ひ

物となるであらう。數多の國破れるならば退く人の食ひ物となるであらう。動く衆が得るであらうぞ。仲間親戚は得られないだらう。國民を得るであらう。一族に生れ

たものを得られないであらう。」と云ふに哈薩爾はこの言葉を然りと化した。

〔第二回終り〕

漢代蒼頭考補遺

漢書蕭望之傳(卷七十八)に

〔王〕仲翁至光祿大夫給事中。……出入從倉頭盧兒。

と言ふことが出てゐる。これは霍光が政柄を秉つてゐた昭帝宣帝の間のことと思はれるが(同傳參看)此の倉頭盧兒は仲翁が光祿大夫給事中として従へてゐるもので、正に漢舊儀に規定文のある官奴に當るものと考ふ可きであらう。顏師古はこれに、皆官府之給賤役者也。と註してゐるが漠然たる言であるけれども、略當を得てゐると思はれる。ただ蒼頭が官奴の特種なるものであることに考へ及んでゐないのは物足りぬ感がある。

以上蒼頭考起草の際の不注意に依り言及す可くして言及しなかつた史料に就て補足を試みておく。(宇都宮)

新京から——近來滿洲國文教部では、學者に依頼して國內諸處の古蹟調査を行つてゐるが、本年九月十月には八木英三郎氏に依頼して錦州省の調査をなした。氏は十月末調査を終へて新京に歸來、文教部にて北鎮縣(北鎮廟、双頭、石屏)錦縣(城壁からの出土品)錦西縣(金の佛塔、金天德碑文)興城縣(城廓、文廟)義縣(萬佛堂、奉國寺)朝陽縣(佛塔)等に關し報告される所あつた。